

俳人 成田千空研究会

千空研究

第15号

今生を燃えよと鬼の佞武多来る

—千空句版画—

藤田 健次

五所川原市の立佞武多を詠んだ一句。一九九六年、80年ぶりに復活した巨大ねぶたは、市民を熱狂の渦にまきこんだ。その高さ20メートル超の偉容は、ねぶたの本場・青森市ご出身の千空さんでも度肝を抜かされたに違いない。津軽の人たちは、こうして、短い夏をねぶた・ねぶたに燃える。それが終われば、お盆がきて、ススキがでて、もう秋である。お前は燃えて生きてきたか。後悔はないか——私の耳元で鬼がささやく。

第5句集『忘年』より。

(版画家・会員／八戸市)



目次

今生を燃えよと鬼の佞武多来る —千空句版画—	藤田 健次	1
千空さんと出会う小さな旅 —ふかうら文学館見学記—	佐々木達司	2
千空俳句に影響を与えた義兄 岡田晴一の郷土史研究	工藤 清泰	4
千空俳句の原郷・十三潟	齋藤 美穂	6
県近代文学館 特別展「平成の青森文学」鑑賞記 千空との新たな再会に	齋藤 美穂	8
千空先生に俳句を習う② 師弟句碑建立のお知らせ	世良 啓	9
千空資料研究⑥ 「昭和六十二年日記」より〈上〉西谷ともえ		10
〈千空点描〉上京のひそかな楽しみ 〈作品鑑賞を読む〉⑬ 引き潮の力もて去る佞武多かな	宮津 昭彦	11
〈成田千空資料再録〉⑭ 川柳と千空 野沢省悟編		12
寄贈感謝・会員名簿・北極星		13
16		

千空研究会の事業

- ① 詳細な年譜の作成
- ② 千空俳句データベースの作成
- ③ 関係資料の収集
- ④ 関係者からの聞き取り
- ⑤ 会報『千空研究』の発行
- ⑥ 『評伝 成田千空』の刊行
- ⑦ 『合本 成田千空句集』の刊行

千空さんと出会う小さな旅

—ふかうら文学館見学記—

佐々木 達 司



6月26日、家内を連れ友人・Nさん夫妻を誘って4人で、ふかうら文学館を訪ねた。オープン以来だから、14年ぶりということになる。文学館といっても、旅館を改装したこぢんまりとした佇まいである。玄関で駐車場はと尋ねると、道路を挟んだ向かい側だと言う。玄関の右手が児童図書室になっている。左手の受付で入場料1人300円を払ってリーフレットをもらう。

階段を上がると二階が展示室になっている。まず、「深浦と文学の間」で案内の映像を見る。北前航路の港町として栄え、多くの文人が訪れている。太宰治を中心に文学者との関係が10分間で要領よく纏められている。Nさんが関心をもって「もう1度見たい」と言うので2度見る。

千空が居そうに再現された仕事場

まずは「千空の間」へ入る。千空の仕事場だった成田書店の一隅が再現されている。背景は写真だが、木の事務机や黒電話は実物である。電話の脇に銚子が1本置いてあるのは、酒好きな千空さんへのサービスだろうか。

突然、後のガラス戸が開いて、「やあ」と千空さんが出てきそうな感じである。横の乱雑に並んだ書棚の写真も雰囲気を感じている。

壁に埋め込まれたディスプレイで映像を見る。「成田千空の世界」が前編後編3分ずつにまとめられているのは、時間のない見学者に配慮していることだろう。

今は跡形もない成田書店の外観や店の机に向かって千空さんの映像は貴重である。仕事場での写真は俳句雑誌などが好んで掲載したが、動画はこれだけではないだろうか。五所川原市運動公園の「大粒の雨ふる青田母のくに」句碑や、深浦町行合崎の「行き合はん岬は草の花だたみ」句碑を訪れたり、芭蕉塚での千空さんの姿が見られる。この映像は開館にあわせて撮影したものである。

隣のコーナーには、略年譜や、句集や作品掲載の雑誌『文芸あおもり』などが展示されている。

再現された成田書店、千空の仕事場



「千空の交流録」では、師・中村草田男や影響を受けた作家・太宰治、俳誌『暖鳥』で指導した寺山修司に触れている。

友人Nさんは昨年、深浦町にUターンしたばかりで、家から近い行合崎はよく散策するという。俳人千空は前から知ってるが、行合崎に句碑があることは知らなかったと言う。

この展示はオープンに1度見ているが、改めて見ると発見が多く、千空俳句の奥深さを知った。そのときは関心のある部分だけに目がいって、ほかを見落としていたのだろう。



ふかうら文学館が落成した。太宰治が小説『津軽』の取材で宿泊した秋田屋旅館を改装したもので、太宰のほかには深浦を紹介した大町桂月、それに深浦を愛した俳人・成田千空が選ばれたのである。その3年前から深浦町近代文学ギャラリー検討委員会が組織され、私も一員として加わっていた。3人の顕彰者のうち千空さんは生存者だったので、必要な資料を今のうちに確保しようということになった。

千空さんの仕事場を再現するため、新しい机を入れて、今まで使っている机や記念品を文学館に移すことにした。

放送局のカメラマンが記録映像を撮影することになり、私も同行した。成田書店の外観、仕事をしている千空さんの姿、市立図書館前の「大粒の雨」の句碑、深浦町行合崎の「行き合はん」の句碑や、芭蕉塚を訪れる千空さんが記録された。

また、色紙・短冊は収集するにしても偏るので、新たに100枚揮毫することにした。色紙も同じものばかりではなく模様入りや、深浦町出身の画家・櫻庭利弘さんの絵と組み合わせたり、倍判サイズなどの工夫を加えた。

千空さんは句を選んだり、絵と句の組み合わせに苦心したようだった。色紙1枚でも文学館に残すとなると、大変な仕事である。だが、これは生存者であるからできた資料収集で、今から思うと大変な宝である。

落成式の日の千空さん

オープン当日の朝、私は五所川原から千空さんと市子夫人を乗せて深浦をめざした。落成式は深

浦町役場にある町民文化ホールで関係者が招かれ、厳粛に行われた。

その後バスで移動し、新装なった文学館が披露された。千空さんは市子夫人と見て回り、参会者からさかんに祝福を受けていた。

帰りには、平沢敬義町長が車まで来られて千空さん夫妻を見送られた。疲れた様子が気になったが、5か月後に肺がんのため57歳で亡くなられたと聞いた。千空さんが前立腺がんのため亡くなったのは3年後のことだ。86歳であった。

(千空研究会代表／五所川原市)



落成式当日の千空さんと市子夫人

【ふかうら文学館案内】

太宰の宿 ふかうら文学館

深浦町大字深浦字浜町134

電話・FAX 0173・84・1070

場所 深浦駅から1キロあまり、歩いて15分

入場時間 9時～16時

休館日 4～10月無休、11～3月月曜日

(祝日の場合はその翌日) および年末年始

入場料 一般(おとな) 300円

映像や色紙は貴重な資料

「大町桂月の間」にはどてら姿で酒をすすめる像がある。「太宰治の間」には太宰の宿泊した部屋が残されており、『津軽』取材旅行での料理が再現されている。太宰書簡や資料も展示されている。映像も見ごたえがある。太宰がここから家族に手紙を投函したことにちなんで「ふみの間」が設けられている。許可を得て写真を撮影する。

例えば平成16(2004)年7月2日のこと、

千空俳句に影響を与えた義兄

岡田晴一の郷土史研究

工藤 清泰

はじめに

本業は考古学である。その筆者が何故「岡田晴一」なのだと、いぶかしむ会員に対して、一言説明が必要である。昭和6〜8年当時の考古学史を調査する中で、五所川原町で発行していた『西北新報』に偶然調査人物の名前を発見した。その記名投稿をしていた人こそ岡田晴一（以下岡田と略す）であった。「郷土史の横顔」と題された連載記事は、一読して新鮮な風を感じた。このような歴史を書ける人物とはどのような人物なのか、興味が湧くとともに少し調べると俳人・成田千空の義兄（姉・寿美栄の夫）であることもわかった。

小稿は、稀有な岡田晴一の文章から、彼の知識源や行動履歴、そして歴史観を探ることにある。ただし、新聞記事は原則的に執筆者校正をしないことから、正式な論考というよりエッセーに近い試論と捉えるべきで、引用にあたっては原文に忠実であるより現在の歴史学で通用する字句に変換・記載していることをご了解いただきたい。

1 『西北新報』の連載記事と歴史認識

記事は、昭和8年（1933）1月25日から同年3月15日までの六回連載である。『西北新報』は5の付く日に発行していて、岡田は途切れること

なく「相内地方郷土史の横顔」を主眼として執筆、六千字弱の分量であった。

全体の構成をみると、(1)十三湊の繁栄史、(2)石器時代の検討、(3)有史以後の蝦夷、(4)奥州十三湊の史実、(5)相内三城と其城主、(6)安藤氏の衰亡となっていて、第一回冒頭は、

今、相内尋常高等小学校門前に立って南方を眺めやれば、満々たる碧水を湛えて由ありげに静かなる十三湖を見るであらう。

とする詩的文章から始まり、いつのまにか史的文章に変化している。

この冒頭文にも布石がある。岡田は各所で弘前藩正史『津軽一統志』附巻にある「十三往来」という文書を参考として挙げるが、冒頭以降の引用「(南は)湖水濃々……」「黒船唐船……(原文は夷船京船……)」はまさに「十三往来」の文言であって、冒頭を意図的に文学的に仕立てている感を強くする。

以降、(1)に関しては、十三の地名由来、廻船式目に見られる三津七湊としての十三湊、津軽安藤氏と十三湊研究の基本書である『諏訪大明神絵詞』・『十三往来』・『十三新城記』の紹介、民謡に唄われる「東風」から地元飯詰の長圓寺に残る正徳年間（江戸時代）の梵鐘伝説を述べる。

(2)は石器時代である。昭和8年当時、歴史は古事記・日本書紀の記述が国家の正史であり、教科書に石器時代つまり縄紋時代の記述はなかった。時代背景としてそのことを理解した上で読み進めると、岡田の勉強が手に取るようにわかる。まず近代日本考古学の始まりである明治10（1877）年のE・S・モース（モールスともいう）の大森貝塚発掘から筆をとり、相内村で調査されたオセドウ

貝塚（伊勢堂貝塚）の発見人骨例を提示する。ちなみにオセドウ貝塚の発見は大正10（1921）年、「円筒土器」の命名者である東北大学・長谷部言人と山内清男（後に縄紋学の泰斗となる）の発掘調査は大正13・14年となるから、岡田は関係者の聞き書きでオセドウ貝塚発見の人骨を記載していることになる。大正10年は岡田15歳の時である。人骨発見記事の後段が面白い。

当時、大日本帝国の先住民は、「アイヌ」と考える学説が有力であり岡田もそれに倣っているが、坪井正五郎のコロボックル説を出すところは人類学にも興味を持っていたことになる。また、貝塚の形成伝説を載せる『常陸国風土記』の「手長・足長巨人伝説」を引用して石器時代貝塚の知識を披瀝している。

青森県は昭和6〜8年にかけて、先住民の住居である竪穴の調査を実施する。その中心人物が県視学官・佐々木新七であって、岡田は昭和7年夏に佐々木が相内村の調査に来た時、下準備をしたことや一緒に調査にあったことを書いている。佐々木新七の詳細は省くが、東京高等師範卒業、考古学に秀で県内市町村の竪穴を悉皆調査、青森市山野峠遺跡や八戸市是川遺跡の発掘にも関係している。筆者が調査している人物である。

岡田はこの年、寿美栄夫人とともに相内尋常高等小学校に勤務していた。この回での末尾に、相内小学校に収蔵している石製品・土製品・土器類・骨製品を列挙している。出土遺物の分類は見事である。

(3)に入ると、『記紀』の記述から「蝦夷征伐」、いわゆる有史【古代】を取り上げる。仁徳天皇の時代から桓武天皇の時代まで、『日本書紀』など

の記事を列挙するが、「蝦夷政策には少なからぬ腐心があった」や「津軽蝦夷は強かった(中略)むしろ善良な組」などの記述を使って、まつろわぬ蝦夷に対して敵対的記述に終止することなく、自らの祖先として愛情に満ちた文章になっている。

特に、皇軍(律令国家側)に味方する梵珠山脈一帯の蝦夷を引き合いに出した上で、アイヌ言葉と大和言葉(古語)が両立している事例から、アイヌ民族と大和民族が「入り混じった」状況と理解している。岡田の生きていた近年まで津軽半島にはアイヌ民族が居住していた事実とともに、青森市広田神社に残るアイヌ民族を描いた絵も「和夷共存」の証拠と見做している。

(4)(5)(6)では、十三湊安藤氏の光芒を遺跡と文献の両面から考察している。特に唐川城跡と福島城跡には注目して、築城時期から廃城時期までの期間や城館主など、十三湊安藤氏の隆盛と一体化しているとみる。

(4)においては、研究史の上で大正13年頃に創設した『十三史談会』(実際の創設は大正11年)の活動が研究の進展を促し、前述した昭和7年6月の県史蹟調査団(佐々木新七代表)の調査状況を記して、「十三史蹟研究のために好個の機会」と提示する。さらに、「日之本將軍」は安倍氏の末裔たる安藤氏であるとの認識のもと、旧制弘前中学校教諭で陸奥史談会会長であった森林助の説を引用、安藤氏は藤崎から十三湊に居を移して隆興に至ったことを確認している。

(5)では、相内三城、鏡城・唐川城・福島城とその城主を考察するが、筆者は鏡城なる城館を知らない。是非とも識者の御教授をお願いしたいところである。ここで、岡田は『十三往来』の新城・

岡田晴一の文章が掲載された『西北新報』の紙面(原本は五所川原市立図書館、半澤紀氏提供)



福島城と『十三湊新城記』の新城・唐川城を比較して、どちらが新城なのかと自問する。その結果、城館の立地や周辺の寺社そして幕末の小山内又右エ門の記録から『十三往来』の福島城を新城とする説を正解とする。

(6)では、南部氏の侵攻によって安藤氏が十三湊から駆逐される顛末を通説によって記述しているため、特記する部分はない。

ただし、「結び」の前半部分は気になる。「結論を急いで大変不徹底(中略)殊に奈良時代、平安時代のもに書きたい箇所があった(中略)今度全編を纏める際にはずっと明治、大正、昭和の今日に至るまでも、書き加えたい(後略)」と記述する。岡田は、相内の郷土研究がまだ途上にあることを明確にして、書き足りない部分は後日に発表

する覚悟であった。

2 記事からみえる岡田晴一

記事の中に出てくる名詞・人名を見ると、岡田が参考としている図書類と一緒に郷土史研究を行っている人材の様子がわかる。そういう視点から見よう。

最初に出てくる大槻博士は、近代国語辞典『言海』の編纂者・大槻文彦で「相内」の地名に関係するが、前段で「鮎内」と表記する文献は天文年間に浪岡北畠氏が編纂した『津軽郡中名字』であり、『津軽一統志』附巻に掲載している。鎌倉時代貞応2年(1223)に成ったとする『廻船式目』は、現在では室町時代成立とされ、越中岩瀬湊は重複していて本来は出羽(羽州)秋田湊となる。新聞の校正ミスによるものであろう。

岡田が参考とする古文書は、以上のほか前述の『諏訪大明神絵詞』・『十三往来』・『十三新城記』であるが、民謡の「蟹田の嵐(東風)」の記述にも「津軽郡中名字」「東風留」を意識している風がある。

考古学に関係のあるモルルス先生・坪井正五郎は、近代考古学の草創期に活躍した人物であり、青森県とも関わりが存在する(福田友之 1998「エドワード・エス・モリスと津軽」『青森県考古学』第4号など)。また、昭和7年の竪穴調査の結果として、鯉崎24、笹館12、赤坂39など、竪穴の数を確認したと記している。この時、調査の準備にあたった人物として、相内村・三和五郎兵衛村長(十三史談会創設会員でもある)、藤田(小学校)校長、安保青年団長、坂本蓮華庵主の名を列挙することは、岡田自身も準備要員であったと確認でき

る。さらに案内役の十三史談会長・奥田順蔵や佐々木新七の脇と一緒に踏査していなければ、堅穴の数を把握することはできないわけで、若手教員であった岡田は、奥田・佐々木の秘書的存在であった可能性もある。

奥田順蔵は、大正2年に飯詰村長から内潟村長に転じているが、岡田が小学校に入学する頃であり、飯詰時代から直接関係があったとは思えないとなると、内潟村長となってからの接触となり、教職となった頃からの知り合いとなる。そうだとすれば、26歳の若年教員を重用し、昭和7年の県史蹟調査団の調査時点でその才能を発見して、昭和8年『西北新報』に連載を委託した人物は、奥田順蔵以外考えられない。現在のところ、郷土史研究の冊子に岡田の名前が出てこない所を見ると、この『西北新報』記事がデビュー作であり、翌年の逝去を考えると遺作となった可能性も高い。

おわりに

岡田晴一の経歴・業績などの調査も終わらないままの小稿であり、誤謬等の危惧もある。あえて投稿を決めたのは佐々木達司氏の有無を言わせぬ依頼と、成田千空研究の一助を期待してのことである。兩人とも十三湖・十三湊には特別の想いを抱いているらしい。

なお記事原文は別に翻刻しているので研究会に問い合わせの上、参照願いたい。参考文献は多々あるが、考古学上では、村越潔『青森県の考古学史』(2007 弘前大学教育学部考古学研究室OB会刊)に依拠している。

(くどう きよひと／日本考古学協会会員／つがる市)

千空俳句の原郷・十三潟

齋藤 美穂

はじめに

俳人・成田千空は津軽半島北部の日本海側にあ
る十三潟や車力周辺を「私の俳句の原郷」と呼び、
季節を問わず頻繁に足を運んで多くの俳句を詠み
ました。

昭和二十五年、千空は五所川原に書店を開き、
積極的に時間を作っては自転車で郊外へ出掛けま
した。そのなかで心を捉えて離さない場所が十三
潟でした。五所川原から北へ約五十八キロの道の
果てに千空が目にしたものは、厳しい自然と歴史
を背景にありのままの姿を曝け出す景色です。「原
郷」とは時空を超えて根源的なものを見出す場所
であり、千空はそこを訪れては風土に根ざす自己
の存在を確かめたのではないでしょう。か。
青森の精神風土を核とした普遍性のある俳句作
りを目指した千空と「原郷」との関わりについて
作品とともに見ていきたいと思います。

亡き父と海

千空の出生地である青森市安方はかつて漁船の
揚げ場や市場のある港町だったそうです。私は千
空の妹・信子さんから「祖父母は野菜を作り、寄
港する船に卸していた」と聞いています。千空自
身も「一番遊びに行ったのは青森棧橋、聖徳公園

遠浅の砂浜が澄んできれいだった」と回想してい
ます。海は幼いころから身近な存在であり、家族
で力を合わせて暮らした日々の記憶へとつながる
場所でした。このあたりは開発されて、現在では
県庁所在地のランドマーク・観光物産館「アスパ
ム」がそびえ立っています。

一とかぶり噛み桃呉れし父なつかし

光培ふ穂田中の父見えかくれ (『地霊』)

千空は八歳で父親を失くしました。学問や趣味
のためによく家を空けたという父との思い出は淡
く断片的です。千空は日本海を一望する岬で、烈
風にも動じず断崖から舞い飛ぶ鷹を仰ぎ見ました。
そして、手の届かぬ場所から見守ってくれる父の
ような存在として俳句に詠み込みました。

潮かすむ岬の海拔鷹やすらふ

(『萬緑』三十一年九月号)

高く広く崖を離るる鷹は父

(『地霊』)

荒吐族の古き道あり鷹舞へり

(『人日』)

原初的な景色に對峙していると縄文から続く民
族の記憶も呼び覚まされました。祖先と父と自分
——悠然と翼を広げる鷹は、過去から現在をつな
ぐ確かな道を眼下に見おろしていました。五所川
原からはるばる十三潟へ向かうことは、津軽人と
して故郷へ帰る行為であったのかもしれませんが。

土地の歴史につながる生活

三十年代、「自分の俳句の骨を作ろう」とした
千空は句作のために津軽半島北部の海浜を訪れ、
全国的な雑誌に次々と群作を発表しました。最果
ての地に立ち、時空を超えて捉えた故郷の詩を世

に問う必要があったのだと感じます。

権現崎は日本海に面する本州北端の岬。途中、金木町に太宰治の生家あり。今は人手に渡り、斜陽館といふ旅館を営む。
十三潟。十三村は八百年前、津軽の豪族安東氏の本拠。津軽文化発祥の地といはれる。今はみるかげもなし。

北日本海

野牛蒡の厚き葉沖は言を吞む

権現岬

岬も萬緑こだまもろとも登り行く

岬の東岸小泊港は津軽最古の港。今も尚蝦夷地と漁船の往き来あり。

塩に蠅蜿蜒生きる港まち

〔権現行〕『萬緑』三十一年九月号

風の葦砂舟錨地に刺す

三十路がかり炎塵ともに過ぎゆく蝶

〔北邊咏唱〕『俳句』三十一年十月号

津軽西海岸は三百年の歴史を保ち延七里に及ぶ。その林中深く川口爽郎と。

一業偲ぶ夏なお深き落葉の中

〔津軽西海岸防風林〕『萬緑』三十三年一月号

風雨に曝された光景、しぶとく生息する動植物、今を生きる人の営み。土地の歴史や風土に根ざして生きるものの実体を掴んだ描写は、県内外の俳人らに強い印象を与えました。

俳人・新谷ひろしは、「追悼大特集 成田千空の生涯と仕事」〔『俳句』平成二十年二月号〕のなかで、「後年「北辺有情」で第五回角川俳句賞（昭和三十四年）受賞の村上しゅらは、八戸に住んでいたがよく千空風土の津軽十三湖周辺を吟行した。

その成果の受賞であった。千空さんの津軽風土に賭ける思いに魅かれ、しゅらも又、吟行を重ねたのであった」と述べています。金子兜太・堀葦男（昭和四十二年）、加藤楸邨（六十年）ら県外から訪れる俳句関係者を案内したことも記録にあります。「原郷」で詠まれた作品は、雑詠や句集未収録のものを含めると相当な句数に上ります。千空はそこで風土への思索を深め、独自性のある作品の礎を築いていったと言えるでしょう。

俳句一途の六十四年

「俳句の骨を作ろう」とした日々を経て、千空は俳句の表現について探究し続けました。晩年のある日の日記には「俳句が湧いてくる」と綴られ、長い年月をかけて自由自在な千空俳句の世界が開けていったことを窺うことができます。句作の欲びと意欲の高まりは衰えることなく、内面の深化を伴いながら明るく平易な表現となって示されました。

俳句一途の六十四年間に上梓された六冊の句集を見ると、「原郷」での句作は生涯にわたって続けられていたことがわかります。作品の普遍性と表現の新化という弛みない句業を見渡せること自体、俳人として容易ならざることではないでしょうか。

『地霊』昭和十八年～四十六年

防雪林沖のごとくに荒ぶ日ぞ

瀉見えて吹く風すさむ葦の骨

藁葬る火よ迅雲の西津軽

『人日』四十七年～五十七年

玫瑰赤し引き潮を押す怒涛音

白鳥や光陰波と絶え間なし

身にしむや米ならばよき十三とさの砂

『天門』五十八年～六十二年

岬の空羽毛をこぼし小雪ふる

早苗饗の木橋やさしき村ざかひ

葦青き性根のうねり岩木川

『白光』平成元年～六年

昨日今日明日赤々と実玫瑰

芦原を焼く火のなびき十三とさの方

不作田の彼方岩木嶺屹立す

『忘年』七年～十一年

鯉とんで潟の濁りを光とす

北吹くや海鳥はみなつよき鳥

西瓜一つ奥津軽野に炸裂す

『十方吟』十二年～十八年

尾白鷺来てゐる風の岬かな

北よりの縦走砂丘小鳥来る

日は月の光つつつ西瓜村

おわりに

「現代に生々しく生きているということと風土に生きていること、この二つの問題を俳句の世界で生かす必要がある」（『証言・昭和の俳句』平成十四年 角川選書）との認識は千空の生涯の課題でした。連綿と受け継がれる北津軽の大地の記憶は、敗戦後の帰農生活と遙か十三潟方面への吟行によって千空の身体に刻み込まれました。現在いまを受け入れて生きるものとして、万物と自身の姿は一つとなって作品のなかに溶け込んでいることに気づかれます。

今回「十三瀉」と千空俳句に注目したきっかけは、六月下旬に考古学研究者の工藤清泰氏から千空の義兄・岡田晴秋（長姉・寿美栄の夫）について伺ったことにあります。

昭和九年、晴秋が二十八歳で早逝したとき、千空は十三歳でした。晴秋との関わりとしては、二十歳で俳句を始めた千空が、晴秋が遺した蔵書の恩恵にあずかったことや村の俳句の先達として敬意を抱いていたことが知られています。

工藤氏は晴秋が書いた「西北新報」の郷土史の記事のレベルの高さに驚いたそうです。「歴史認識はともすると学派によって偏向するものです。しかし彼の文章からは相当な学識と公正な歴史認識が感じられ、注目すべき人物だと思いました」とのお話でした。

晴秋が十三の歴史に詳しく、最晩年まで論文を執筆していたことと、千空が句作の原風景として十三方面に特別の感慨を抱いたことは偶然ではないのかもしれませんが。少年時代から毎年訪れていた母の実家・飯詰村で、千空が義兄から最新の歴史学を聞いていたとしたら、「原郷」のイメージは早くから作られたことになります。

工藤氏は俳人・成田千空と十三瀉の関わりを知らず、私は晴秋の郷土史での業績を知りませんでした。岡田晴秋を通して考古学と文学の研究が交わることはたいへん興味深いことです。千空研究のために原稿を寄せてくださった工藤氏に感謝を申し上げ、本稿を終わります。

（千空研究会調査研究員／五所川原市）

千空との新たな再会に

青森県近代文学館
特別展「平成の青森文学」鑑賞記

7月14日、青森県近代文学館で夏の特別展「平成の青森文学」が開会しました。

この特別展は、平成30年間の青森文学の動向を文学関係者16人の寄稿とともに概観するものです。多様なジャンルで活躍中の作家を紹介している点でこれまでの文学展とは趣向が異なり、私の期待はふくらみました。

文芸評論家の三浦雅士（以下敬称略）を筆頭に、梅内美華子・川上健一・木村友祐・呉勝浩・世良啓・高橋弘希・高森美由紀・田澤拓也・西崎憲・野沢省悟・藤田晴央・古川智映子・堀川アサコ・米田省三・吉田徳壽といった魅力ある執筆陣によるエッセイの競演は、「展示会場が一つのアンソロジー（作品集）」という主催者の狙い通りに充実したものでした。

順路を進んでいくと突き当りの壁に掲げられた千空の肖像が目飛び込んできます。雑誌『文芸あおもり』で企画した「千空対談」の一コマでしようか、黒縁の眼鏡にスーツ姿、知的で頼もしい横顔の千空が、「やあー」とばかりに迎えてくれました。

今回千空の解説を担当した米田省三は、「平成津軽のお父」と題して千空の主な活動と業績を紹介し、平成の青森文学にもたらした功績を明らかにしています（会場で名文を味わうのが一番）。

4年前にこの展示室で開催された「成田千空

展」は、主に俳人の生涯を回顧するものでした。今回の特別展ではジャンルを横断する視点も加わり、青森を代表する文学者として存在感を放つ千空に出会えたことが何よりのよろこびです。

十八日には特別展の寄稿者の一人で芥川賞候補者・高橋弘希の受賞が発表されました。県内の盛り上がりですが、新しい時代のスタートにつながっていくことを願っています。今回の特別展はますます関心を集めることになりそうです。会期は九月二十四日まで。ぜひ一度足をお運びください。

（齋藤 美穂）



特別展

平成の青森文学

（県近代文学館承認済）

7月14日（土）～9月24日（振・月）

入場無料

青森県近代文学館 企画展示室

開館時間／午前9時～午後5時

（休館日／8月23日（木）・9月12日（水）

■展示会場が一つのアンソロジー（作品集）

―豪華執筆陣による特別寄稿■平成を彩った青森ゆかりの文学者たちの直筆資料ほか

千空先生に俳句を習う②

師弟句碑建立のお知らせ

世 良 啓

2002年10月15日、私にとっては第2回の句会である。まず千空さんは「草田男句碑」についての趣意書を渡した。

趣意書

この度五所川原市菊ヶ丘公園の一隅に、先師中村草田男の句碑を建立することになりました。碑に刻む句は、戦後の代表作

炎熱や勝利のごとき地の明るさ 草田男

です。同地には既に

大粒の雨降る青田母のくに 千空

の碑があり、ここに師弟句碑が実現することになりました。先年、成田千空萬緑青森支部長が蛇笏賞を受賞した記念に希っていた句碑でした。雨の青田と炎熱の対照もその理由であります。

炎熱の碑は、既に石の選定を終え、十月中旬完成・十一月初旬除幕を目途に準備をすすめており、順調に推移しております。

つきましては、これの除幕に充てるための皆様方のご厚志を賜りたくお願い申し上げます。

一口 二、〇〇〇円

縦書きの趣意書の發起人欄には、敦賀晴川、会

津正治、蛭名晶子、富士光生、成田千空とある。もう一枚は横書きで「除幕式等への出席のご案内」とある。

この度は、師弟句碑の除幕について心あたたまる寄金をいただき、まことにありがとうございます。

さて、次の通り除幕式を行いますので、ご出席くださいますようお願い申し上げます。

なお、除幕式終了後、直会を行う予定です。併せてご出席くださるようお願い申し上げます。

記

1 除幕日時 平成14年11月4日(振替休日)

午後1時

会場 五所川原市 菊ヶ丘公園(図書館前)

2 直会 同日 午後2時30分

会場 五所川原市「ホテル・サンルート」

会費 4,000円(当日、会場で承ります)

「直会^{なおらい}、というのはね、神事が終わってからする酒宴のことです」と千空さん。続けて碑の句について次のように解説してください。

《草田男の「炎熱」、千空の「青田」、どちらもともに昭和22年、戦後直後の句である。日本の敗戦を知って草田男は3日間泣き通し、しばらくショックでぼうっとしていたという。そこからようやく立ち直って、夏に詠んだうただ。

一方、自分(千空)のものは、しっとりとした風土の句である。草田男のものは地域、風土を超越した強さや広がり、ギリシア的世界のような、たくましさのある大きな句だといえる。日本は負けて、人間は敗戦の中にいるが、大自然はそんなこ

とおかまいなしに、明るく熱く、まるで勝ったようだ、と。人間世界の勝ち負けなどを超越した世界の句である。草田男の命日8月5日は「炎熱忌」という。彼の代表作となっているのだ。》

ちなみに、「師弟の句碑というのは全国で初なんです」と千空さんは仰った。

この日の最後に先生はわざわざ「あなたもよかったです、来てみたらいいよ」と私に声をかけてくださった。

部外者の新参者が、なんだかすごいこんな句碑建立の会なんかに参加していいんでしょうか、みたいなことをオロオロ言っていると、「うん、いんだいんだ。来ればいい」と言った。結局私は11月4日、菊ヶ丘公園の除幕式に出かけていった。雨が降っていた。その話はまた別の機会にしよう。この10月15日の参加者は17名。宿題は当季雑詠2句と秋桜だった。

いつも句会の終わりに次回の宿題が発表され、締め切りまでに千空さん宛てにはがきを書いて投句するシステムだった。当時の私はまだ何がいい句でだめな句か自分では判断できず、複数の句を書いて送っていた。その中から比較的ましなものを千空さんが選んで載せてくださる。

はがきで送られてきた句を、作者は伏せて千空さんがえんぴつでランダムにB4用紙一枚に書く。このスピードが尋常ではない速さなのだ。それを全員分コピーして教室で配布する。私たち生徒は、その中からこの日は各自7句(うち〇が1句)を選ぶことになっていた。

ちなみにその日の私の雑詠二句は、
死んだふり蟬蛸そろりと皮を脱ぐ
栗拾いおいてけぼりの子が怒り

どれも日常の一コマをそのまま句にしたつもりだった。前回褒められたので無意識のうちに「ま、こんなものかな」ぐらいの緩んだ気分もあったかもしれない。

この回の千空さんの批評は辛口だった。まず「死んだふり」というのがよくないね、「子が怒り」もよくないな、「怒り」なんて言葉で説明しちゃだめなんだよ、せめて「子がひとり」にするとか、などなど、よくないづくしであった。前回にはビギナーズラックで、実は私は何にも俳句のことをわかっていないということがバレてしまった。千空さんは早口で、句の欠点をざくざくずけずけ仰る。最初どぎまぎして冷や汗が出るほど、でもそれはかえって気持ちいいくらい見事だった。初心者もプロも関係なく、句や言葉については容赦なく批評する。でもそれは句だけのこと。あの教室には人として、同じ仲間としてしっかり受け入れてもらっている、という不思議な安心感があった。今日ここに縁あって集った一同への愛情とか信頼が千空さんから静かに発せられていた。弟子や他人によく思われようなどという姑息な意図はみじんも感じられず、どの句に対しても率直で、正直だった。この人にうまいと褒めてもらいたい、と素直に思えた。

(文筆家・高校教師／藤崎町)

(続く)

パソコンで「千空研究」が読める

「千空研究会」または「株式会社文芸印刷」で検索すると、会報のバックナンバーが読めます。

千空資料研究⑥

「昭和六十二年日記」より(上)

西谷 ともえ

「大型原稿 自由日記」は言海社発行、丹青社が発売した日記帳である。中扉には集文館とありよくわからない。数年来これとおなじ日記帳を使っているようなので、書店で扱っていた商品なのだろう。日付は自分で入れるようになっており、中は22字×12行の原稿用紙になっているが、マスをほとんど無視して書いている。

昭和六十三年に千空さんは四代目萬緑選者になり、俳人協会賞を受賞する。この日記はその前の年のものである。この年は新年早々訃報が相次いだ。日記帳からいくつか抜き出してみる。番号は引用者。

① 1月12日 曇時々晴れ

一日天気平穏。だが、朝方吹田登美子からの電話で宮川翠雨の逝去を知る。四日前に雨声会の新年書展で倒れ、面会謝絶のまま、逝ってしまったという。書家が書展で倒れるのは本望とすべきかもしれないが、まだ、七十五才。一月五日に前田水馬と話をして、翠雨は九十才ぐらいまで生きて、はじめて翠雨の本領が現われるのではないかと、意見が一致した矢先である。惜みても余りある死である。最近不思議に手紙をいただいている。翠雨は棟方志功、工藤甲人などに比敵する青

森の至宝的芸術家であった。(後略)

② 1月13日 雨雪

夜来、翠雨を悼み句作。鰯ヶ沢の歌人鎌田純一も急死。五所川原の柳人小山吉朗も危ういという。昨夕、前青森銀行頭取、渡辺泰助の未亡人が強盗に刺殺されたというニュースが新聞に出て、おどろく。戦後早々、渡辺泰助と吹田孤蓬居で会ったことがあり、文化人実業家であった。百二十年続いた青森の味噌屋で何なく自由なく暮した人生にも魔の手がのびて崩れてしまう無情さを痛く感じる。(後略)

③ 1月16日 曇のち晴のち曇

朝、宮川翠雨への弔句を色紙に染筆。真冬日の墨気ただよふ佛かな十一時のバスで青森行き。葬式(蓮心寺)へゆく途中、成田家に立ち寄り、皆んなの無事を確認して寺へゆく。簡素な祭壇がすがすがしく翠雨にふさわしい。会葬者が満堂をくまなく占め、別れを惜しむ。中央の書家の弔詞があり、吹田孤蓬が弔句一句を捧げ、親友翠雨へ語りかける。涙声ともくだる。津軽辯に打たれる。(後略)

④ 1月21日 曇、雪少し

荷捌き 外回り
除雪作業
週刊朝日の「街道をゆく」(司馬遼太郎)は秋田県毛馬内。十六才のとき友達三人で毛馬内に泊まり、歩いて十和田湖へ行った時のことを

思い出す。司馬の文章で歴史家内藤湖南と毛馬内の関係を知る。(後略)

⑤ 2月6日 晴

荷捌き 外廻り

(前略) 午後一時すぎ、佐々木達司から電話あり。唐崎みどりが「たった今」息を引き取ったという。店を閉めて、胃腸病院へ行く。病室で佛様を拝む。十和田の牧師と佐々木達司、井沼章と相談。二時過ぎ、みどりの妹と叔母が到着。病院で牧師の祈りの言葉あり。(後略)

。2月14日 寒し

荷捌き、外廻り

津鉄俳句会選。選稿を送る
午後二時すぎ、館岡の野呂大工さんの車で、野呂夫妻、佐々木達司夫人、木造教会牧師夫人と一緒に十和田市へ向う。途中吹雪に遭い、車が難儀する。十和田市に着いたのは五時すぎ。三本木教会を探すのに又一苦勞して、ようやく六時からの通夜に間に合う。通夜の後唐崎みどりを偲ぶ会があり、八時すぎ大久保家に五、六人集り、みどりを偲ぶ。大久保夫妻のもてなしを受け、十二時過ぎまで彼と語る。

⑥ 2月15日 晴のち雪 寒し

朝、八時すぎに起床。昨日と変る好天気にはっとする。朝食をご馳走になり、彼の車で雪ふかい隠れ家(梅部落)へゆく。句作。後、米田一穂を訪う。(略) 午後一時から葬式。簡素だが、盛儀。会堂に人が溢れる。友人を

代表して弔いの言葉を述べる。式後、埋葬に参列し、教会で親族や友人と語り、五時すぎ木造教会の牧師の車で牧師夫妻、と井沼章、私の四人で帰る。又々猛吹雪で車が難儀する。九時過ぎでようやく五所川原に着く。二日間いろいろな人々と語り、有難く思う。

。2月22日 曇

荷捌き

青森行。文芸協会の佐々木達司、井沼章と一緒に
教育会館で新春文芸懇話会。

講師加賀谷健三。歌人・加藤東籬のこと。

淡谷悠藏他十五人ほど参集。東籬研究の第一人者だけに密度の高い話を展開、出席者に感銘を与える。驚いたことに今まで誰一人東籬の歌を読んでいなかった。それだけに有意義だったと思う。(後略)

。2月24日 曇 晴

荷捌き(略)

平山五朗の妻君の葬式。法事。

平山家では父と母、五朗が死んでいない、今五朗の妻君が死に、娘二人が残されて、さびしいのだが、五朗の弟 健三郎を中心に親族の働き手が葬式法要を捌き、妙に安らかな雰囲気であった。二人の娘(牧子、悦子)を力づける。(後略)

。3月30日 晴れのち曇

「翠雨雑記」を読む。生前さほど面白いとも思わなかったが、死後読み返してみると、文

【千空点描】

上京のひそかな楽しみ

千空さんは「萬緑」の代表として、月に1度上京していた。最初は夜行寝台車、後には航空機や新幹線を使っていた。会議・句会などで忙しかったが、翌日の午前は美術館という密かな楽しみがあったようだ。

千空さんの日記にはときおり、入場券の半片が挟まれている。

小学生から絵が好きだったというし、自分でも描いていたし、美術館めぐりもよくしていたのである。

千空さんは若い画家たちの絵を見て批評したり、新聞に展覧会評も書いたりしていた。

昭和24年秋、書店開業準備のため上京したときは日展を見に行き、「一枚一枚丁寧にしていると薄暗くなって画面がよく見えず」と、翌日また行っている。俳句仲間で書家の宮川翠雨と偶然会場で会い、「入選のおめでとうを言う」と日記に書いている。

鷹となる鯉魚の夢の絵春深し

(棟方志功美術館、『白光』)

〈佐〉

章から翠雨の語り口、声まで聞こえるような文章でおもしろい。(後略)

⑧ 3月31日 曇 寒し

夜来、雪。

荷捌き、外廻り

月末多忙。

小山吉之助、元五所川原教育長が亡くなったという。教育長時代が長く、私を社会教育委員や中央公民館の審議委員に推し、又、五所川原市文化褒賞に推した人である。川柳家として、岩木吟社を主宰し、俳句の世界を好意的に見ていた人でもあって、いろいろとなつかし^な思い出がある。川柳家だけに人の心をするどく見ていた面もある。案外孤独な人であったかもしれない。

。4月8日 晴

(前略) 東京の平井さち子から電話。萬緑の

「樹頭の花」は現在編集委員で選んでいるという。香西照雄選の名はそのままだにして。香西は脳コーソクは回復が遅れ、選はまだ無理とのこと。対策を考える必要あり。(後略)

。4月15日 晴

ようやく春らしい陽気が定ったようだ。平井さち子から来信。岐阜での萬緑同人会で北野民夫氏の談話をテープで取り、それを書き起こしてわざわざ伝えてくれる。香西照雄(樹頭の花選者)が倒れて以来の運営委員会の内幕がはんしく^く伝えられて前途が樂觀視できない。(後略)

。5月6日 晴のち曇、雨のち晴 肌寒。

唐崎みどりについての原稿を文芸協会の佐々

【作品鑑賞を読む】⑬

引き潮の力もて去る佞武多かな

佞武多については、ここで改めて紹介する必要もなかる。青森の佞武多、弘前の佞武多、それぞれ有名である。それ以外にも津軽地方の各地で佞武多は行なわれているのであるが、この句の佞武多の規模は大きいもののように思われる。引き潮の力もて去って行ったというのであるから、多くの人が佞武多とともに移って行ったさまが想像される。「引き潮の力もて去る」と言う把握が力強い。

こういう力強い把握はこの作者の独壇場であって、この句のほかに、

雄^をの馬のかぐろき股間わらび萌ゆ
花柘榴噛みちぎられしさまに散る
妻の水屋人參太く充血す

などがこの句集『白光』に見られる。これらは作者のエネルギーを対象に注入しようとするかに思われる手法であって、このような形で感動を対象と共有しているのである。そこに手法の特色と、作者の体質を覚える。

海やまの更けて佞武多のなごり笛
も佞武多の句であるが、この方には哀愁が漂う。感動の現れ方が多面であることをこの句集はよく教えている。

宮津 昭彦

(「俳句」平成9年6月号)

木達司に届ける。追悼遺稿集を編集集中で原稿も集まっているようだ。死屍を鞭うつような生々しい原稿はカットした方がよいと進言して置く。(後略)

①・③は宮川翠雨の死について。水馬とのエピソードは、二人が翠雨をどう見ていたのかがわかり面白い。また、千空さんは翠雨を尊敬する棟方志功や、工藤甲人と並ぶ「芸術的至宝」といい、無念さが伝わってくる。⑦で「翠雨雜記」を読んでいるが、後日「暖鳥」に翠雨の追悼文を掲載しようと思ったためようだ。人物について思い出だけて描かず、しっかりと作品を読んで書くのは、頼まれた句集の序文を書くときと同じである。

②で危ういと言われた小山吉朗は⑧の小山吉之助のこと。

⑤の唐崎みどりは萬緑の同人。訃報に接し、萬緑青森支部としても対応しなければ、と翌日の日記書いている。

そんな寂しい年のスタートではあったが、「週刊朝日」連載の、司馬遼太郎「街道をゆく」は楽しみにしていたようで、他日にも感想を述べている。また飯田龍太の連載も楽しみにしていたようだ。

⑨は草田男亡き後、萬緑の選者をしていた香西照雄が病に倒れもない頃のことである。香西は6月死去、その後選者は北野民夫に引き継がれるが、程なくなくなり、千空さんに引き継がれることになる。

(県立青森高校教諭・元県近代文学館副室長／青森市)

川柳と千空

野沢省悟編

一般的にみて、俳人で川柳に興味や関心を持っている人は少ないと思う。ましてや川柳を理解し直接関わる俳人はほとんど居ないと思われる。

以前俳文学者の復本一郎氏と話す機会があり、その時聞いた話であるが、俳壇では月刊誌でなければ評価されないという。つまり僕の聞きまちがいでなければ、俳壇では月刊誌以外は評価の対象外ということである。とすると、俳人から見ると俳句と同じ17音定型の川柳は、もっと遠くにある離れ小島か、いや存在すら知らないという感覚と思われる。

しかし千空さんは全く違う。川柳を文芸のひとつとしてしっかりと見つけていた。俳誌「萬緑」代表であり蛇笏賞作家である千空さんは、川柳を理解し直接句会に参加までしたのである。

その関わった資料をまとめてみた。

千空さんは1988年「萬緑」代表となり、俳人協会賞受賞。その後、

①1994年11月3日「第一回俳句・川柳合同研究句会」へ参加、講演し投句までしている。

②1996年12月27日、東奥日報に拙著『現代川柳評論集 極北の天』の書評を書いている。

③1998年2月21日「第5回たんの会」へ参加、この年千空さんは蛇笏賞受賞。

④1999年6月6日「第4回現代川柳の広場大会」へ参加。

⑤2005年5月『川柳誌 双眸』に「川柳を語る」を発表。

これだけ川柳に関わった俳人は他に居ないと思う。これらの資料は、まず第一に川柳人が目を通すべき貴重な資料と思う。

①俳句・川柳合同研究会 講演

「俳句と川柳」

成田千空

俳句と川柳合同句会について

野沢省悟

昨年(1994年)11月3日、青森市の労働福祉会館において、俳句・川柳の合同研究句会を行った。

主催は現代川柳「雪灯の会」で、俳句結社「ら・めんで句会」(浅利康衛代表)と青森県文芸協会が後援した。出席者は、俳人9人、詩人1人、柳人22人であった。

〈講演抄出〉

私は川柳というものをほとんど作ったことがないんです。ただ、昭和二十四年頃ですか、五所川原のいわき吟社に行ってみたことがあるんです。川柳ってもっとユーモアがあって、お互い笑いあいながら句会をやっているのかと思いました。けれど全く違いましたね。非常に真面目です。びっくりしました。

俳句の方はもっと御託などをあげながら、句会をするんですが。ですから、本当に真面目なんだという気がしました。そしてそのとき私俳句を出したんですけれど、なんと最高点だったんですよ。句は忘れましたが。そして川柳の方が言うには、「なんてよい川柳なんだろう」と。俳句のつもりで出したのがいい川柳だと評価を受けまして、川柳と俳句が接近しているのかなという気がしたことがあります。

川柳は江戸です。ここに違いがあります。関西からだと俳句と江戸から生まれた川柳。この差が非常に出て来

ました。

私は思うんですけど、民衆文芸がどうして起こったのかというと、二つの民衆文芸の形が考えられます。やはり当時の俳諧で言えば京都の文化ですね。京都の文化に対する民衆の反発があったはずなんです。ですから俳諧というのは芭蕉が言うように俗語です。和歌の伝統につながる連歌の伝統の雅語にたいして俗語を使うということです。俗語文芸として作ったものが俳諧として出発したのです。

川柳は俗語を更に俗に徹した言葉です。それで作者が非常に多かったということです。ですからそのエネルギーのなかには柄井川柳も名代ではありますけれど、階級としては一般の侍でもない一般の庶民の待遇ですね。庶民の待遇であって教養があつてしかもその当時の京都の文化に対する反発があつたと思うんです。もうひとつ自由な発想でやろうという形。俳句も川柳もそういう面では似たところがあるんです。民衆詩です。短詩形だということです。

川柳は逆に季節感はさして関係なく、人生とか世相とか時代のそういうものに対する関心に移って行く訳です。そういうことになりますから自ずから自由な発想でしかも季節とか切れ字とかに束縛されない訳ですから、素材に対しても世界が大変広いんですね。俳句の何倍も広い。そういうことも一つの形式から生まれてくるということもありますので、川柳の方がずっと自由な発想でいい作品が残ってしかるべきだと思います。

しかしながらなぜ文芸として認められないのかというと、卑俗の方向に落としてしまうからなんです。多分僕の独断と偏見になりますが、自由さというものが卑俗の方へ、おかしみの世界へうがったり、もじる、落としてくるそういうふうになってしまふんだと思います。

伝統川柳というのは、おかしみとかもじり、うがちなどの滑稽みを重んじる流れ。もう一つは近代川柳というか、詩ですね。生活感情を含めて詩として捉える。この流れが川上三太郎の流れです。伝統川柳の方は前田雀郎の流れ、こういう形があります。もう一つの流れは社会主義リアリズムといえますか、社会批判を強めて行く川柳です。

中村草田男がこう言っています。「現代俳句は現代川柳と接するのはやむを得ない」と。川柳というものを作っているとは俳句のようになるのだ。俳句を作っていて川柳になるようなこともあるかもしれない。そういうことを言っていましたね。つまり川柳のもっている自由な発想、現代俳句のもっている近代化の要素、そういったものがないがしろにできるものではない、と注目していました。

結論を言えばこうなります。俳人が俳句を作っているつもりなのに実は川柳になっている場合、川柳の人が川柳のつもりで実は俳句になっている場合、両方の接点の中に今いるということですね。

だから自分たちはいい川柳を作る、いい俳句を作る。そういうふうで良いと思う。それに専念する以外にない。その中に川柳として通用する俳句など、双方のダブって来る場合がある。そこから何を導くのかという心構えが大切です。そういった時代の変遷の中で、また新しい「俳詩」といったジャンルが出て来るかもしれない。

〔双眸〕第十五号、二〇〇五年五月二〇日

②野沢省悟現代川柳評論集「極北の天」

川柳の方向性を追求

成田 千空

野沢省悟氏の現代川柳評論集「極北の天」を読んだ。

大雪の日のバスの中で読んだ。大雪のために車が渋滞して、青森から五所川原まで三時間ちかくかかったが、私はこの本のおかげで全く退屈しなかった。のみならず俳人としても学ぶべき問題が提起されていることを知った。彼は私の若い友人であるが、普段は口かずも少なく、もっさりとしている。だが文芸意識の高い川柳人である。

今度の本は彼がこれまで雑誌や新聞に発表した文章を、評論、作品論、随筆の三章に分けて集録しており、「現代川柳がいかなるもので、どのような方向性を持つべきものかを自分なりに追求した」（あとがき）という、その筋が一貫している立派な評論集だと思う。川柳の世界で本格的な評論の書き手がきわめて少ないといわれている現状で、本州の北端から発信された、この評論集は現代川柳に何らかの影響を与えることが予想される。

川柳を現代に生きている人間の自己表現と考える視点から、明治の新川柳改革以後の歴史を洗い直して、現代の文芸として通用する川柳を希求している。その過程で彼が注目した作品や作家を、読者があらためて知り、一種のカルチャーショックを覚えることもあるはずである。突撃を待った右手は草握る

という、戦争中の無名の一作者の作品について彼はこう書いている。「この視点には、まぎれもなく生活体としての生身の個我的視点がある。それが戦争当時も受け入れられ、今も我々の心にせつせつと訴える作品となっている。ここには他者の何の道具も持たずに、己の爪で川柳を創っている姿がありありと見える」

彼が特に注目した作家の中に、川上三太郎、鶴彬、田中五呂八らがいることも知った。

龍飛岬鴉しんしん雪しんしん
手と足をもいだ丸太にしてかへし

風船の中のいのちが渦を巻き

昭和初期の新興川柳の旗手といわれた五呂八は川柳に詩を求めた作家であり、五呂八論が特に光っている。

川柳と俳句が接近してきているのも、文芸としての質

を高めようとする新しい川柳作家たちの動向に起因している部分があると思われる。

（五所川原市、「萬緑」主運者）

* 野沢省悟現代川柳評論集「極北の天」は青森県文芸協会刊、B6判、二四八頁、定価一、八〇〇円

（東奥日報、1996年12月27日）

③第五回たんの会

とき 98年2月21日

ところ 労働福祉会館

参加者

〈俳句〉成田千空、竹内てる子、小笠原禮子、高森ましら、安田蛭女、山田一穂、高橋けん一、風張景一

〈川柳〉高田寄生木、高田和子、野沢省悟、笹田かなえ、鎌田玲子、矢本大雪、内山孤遊、福田文音、吉田州花、三嶋大久、工藤寿久、鳴海ハマ、櫛引八千代、伊藤あき、関光子、佐藤俊一、佐藤とも子、佐藤雅秀

◆特別選『自由吟』 成田千空 選
（俳句、短歌、川柳いずれでも可。二句吐き。事前投句。）

秀句十五句、特選三句いずれも順不同

《秀句十五句》

巖襖背にかもしかの孤高かな	小笠原禮子
木守実が一つ詩わぬ村ひとつ	工藤 寿久
点滴のボトルに酒を入れようか	鎌田 玲子
病む人のそばでことばを聞くみかん	鳴海 はま
骨相も遺産のひとつ冬の川	高森ましら
雪まろげ熟れゆくものや乳房まで	櫛引八千代
胡桃ころころ私は何を残したか	吉田 州花
濡れながら待ってる傘の人ざらい	高田寄生木
子等の名も雲に忘れし母笑う	工藤 寿久

雪あかり妻のワイングラスの中
鎖編みわたしの影もこめて編む
湯豆腐やちらちら雪の弾き語り
帰り来し独り身の娘へ晩餐の辛口ワインは父に注がせよ

野沢 省悟
鳴海 はま
三嶋 大久
兼平 勉
死火山の火口の如く鴉おり雪の計報はきらきらひかる

矢本 大雪
群れとべる海猫の一羽が波の秀を切りてかの日の恋攢ひくる
山谷 久子

《特選三句》

海越えて降る雪父を眠らせぬ
受話器置く手の冷たくて一葉忌
蒨葦草生傷絶えぬ俺が食う

矢本 大雪
野呂 富枝
鎌田 秋一

(現代川柳「雪灯」No.61、一九九八年三月十五日)

④第四回「現代川柳北の広場」

- ・とき 六月六日(日) 午前十時
- ・ところ 労働福祉会館(青森市本町)
- ・参加者 県内外より六十三名
- 特別選「涙」 成田千空(俳句) 選

(披露と講演・98年度蛇笏賞受賞)

佳作

涙腺を枯らし案山子が立ち尽くす
竹人形竹より青い涙して
うれし涙をたくさん流し夕焼ける
涙こぼれぬ闇に人形のかおになる
大粒の涙一滴エノラ・ゲイ
ふきのとうしらずしらずのもらい泣き
涙など知らず菜の花嫁にゆく
夜濯の母に乾かぬ涙つぽ
活き造り平目の涙見てしまう
涙壺にすみれの花が咲きました
菜の花は丸い涙の向こう側

古拙 律
八千代 裕子
ましら かなえ
雅子 八千代
文香 八千代
はるひ

乾くまで涙は小さき火を孕む
水色の涙の返事さくら散る
紫陽花が泣きやんで母透けてゆく
涙跡おもしろいよ皆すべる

死ぬときの涙を拭いてくれましか
涙する母をやっぱり裏切れず
旗をたたむとふいに涙が止まらない
嘘すこし海の匂いのする涙

一筋の涙がくれたありがとう
特選

老父を叱って涙まっすぐ落ちる

(川柳誌「かもしか」四〇九号、一九九九年九月一日)

裕子

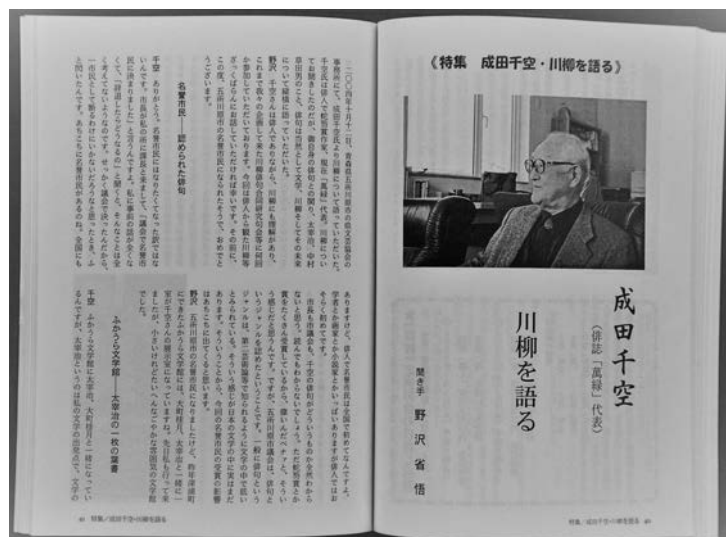
⑤成田千空 川柳を語る

その前に、文芸あおもり(二〇〇四年七月)に載った私の入退院前後の俳句。一五四句ありますが、あれを読んだ野沢さんが、「あれは川柳ですな」って、そんなふうに言われるとショックなだけで、そう言われればそうかな、と。と言うのは俳句の場合は自然を見るでしょう、それがないもんですから、湧いてくるものを俳句にする。そこが川柳作家から見れば川柳に見えるのでしょう、たぶん。

「緊急入院」より十句

我ありと思ふ冬夜のどん底に
年の果実の果の紙おむつ
口惜しきもの歳晩の紙おむつ
糞尿もいのちの証日の始め
人日や力をつくしめしを食ふ
身の管につなぐゴム管冷まじや
雪山河癒えねば死ぬるまでのこと
大うんちして泰然とお元日
あらたまのベッドカーテン若菜色

病むゆゑにこころ幼なくなつた粥



まあ、俳句も和歌という雅の世界から出てきた文芸を、完全に俗語の併用に持ってきた。俗語を生かして来た。俗語というのは庶民の世界ですから。革命したんですよ、短歌から俳句に、俳句をさらに川柳は革命したんです。ですから川柳は革命の流れの中にある。川柳というのは庶民にだんだん降りて来る。だから誰にでも出来る文芸になって来た。誰にでも楽しめる文芸、全体の質のトータルから見るとレベルが低い。だからこそ新しく川柳をやっている人を私は尊敬しますね。

(「双眸」第十五号、二〇〇五年五月一〇日)

(柳人／柳誌「触光」主宰／青森市)

寄贈感謝

齋藤光子さん（青森市）

千空関係新聞コピー

浅利康衛さん（青森市）『まほろば』6・7・8月号

原稿を募集しています

会報『千空研究』の原稿を募集しています。

1. 調査・研究に関するもの（4000字以内）
2. 回想の成田千空（2000字以内）

締め切り 第16号は10月末、到着順に掲載します。
送り先 （下段発行所、青森文芸出版あて）

*Eメールで送信くださる場合

sasaki@a-bungei.co.jp

会員を募集しています

会報『千空研究』継続配布をご希望の方は、会員として登録ください。会費は年1000円です。

2018年会費を領収しました（敬称略）No.14以降

工藤清泰、齋藤光子、清水雪江、米田省三

青森文芸ブックレット

わが心の〈千空〉

俳人 成田千空研究会編

会報「回想の成田千空」24編

税込9200円

千空句帖

文学で青森を応援する会編
戦時下の手作り句集を写真版で
税込10800円

中村草田男訪問記

成田千空

「暖鳥」掲載文と私小説風元原稿

税込5000円

*お申し込みは青森文芸出版

☎0173-3515323

会員名簿（63名）

〈青森市〉

浅利康衛、荒谷信子、齋藤光子、佐藤陽子、高森ましら、中嶋義雄、成田市子、西谷ともえ、野沢省悟、野村正彦、浜田しげる、未津きみ、吉田州花

〈弘前市〉

阿保子星、石崎志亥、泉風信子、市田由紀子、鎌田義正、後藤隆、佐藤繁、館田勝弘、土田紫翠、成田圭子、三上弘之

〈黒石市〉

鳴海顔回

〈藤崎町〉

清水雪江、世良啓

〈八戸市〉

上條勝芳、小林凡石、仁科源一、藤田健次

〈十和田市〉

米田省三

〈五所川原市〉

会津明郎、荒閑映子、一戸鈴、葛西幸子、木津谷絹子、櫛引麗子、齋藤美穂、櫻庭利弘、佐々木あさ子、佐々木達司、高橋睦子、奈良知治、浜田十三、松宮梗子、山内ひろ子

木村玲子

〈板柳町〉

木村玲子

〈中泊町〉

外崎文夫

〈つがる市〉

兼平一子、工藤清泰、中村雅之

〈深浦町〉

草野力丸、山本こう女

〈岩手県盛岡市〉

瀬川君雄

〈茨城県那珂市〉

永山憲子、寺門資子、矢須恵由

〈茨城県水戸市〉

糟谷雅枝、小泉光子

〈茨城県日立市〉

高井まさ江

〈千葉県流山市〉

藤壁まさ志

〈大阪市〉

川東郁代

☆北極星☆

○今号の1面、千空句版画は佞武多である。「作品鑑賞を読む」も佞武多を選んだ。佞武多が終わると暑かった夏も過ぎ、秋風が吹く。

○オープン以来、14年ぶりにふかうら文学館を見学した。改めて見ると、知らなかったことも多かつたのしい。一度見た方にも発見があるはずである。

○古い地域新聞から千空さんの義兄、岡田晴一のことがある。いろいろ判った。教師・俳人だったばかりか、歴史研究者でもあった。千空俳句に有形無形の影響を与えた人物である。工藤清泰さんに無理を言って「岡田晴一の郷土史研究」を書いていただいた。

○それに刺激されて、齋藤美穂さんの「千空俳句の原郷・十三潟」が生まれた。意外な繋がりがあるらしい。

○「川柳と千空」は、柳人・野沢省悟さんがまとめた資料の再録である。千空さんは、「俳句と川柳は接近している。将来、俳詩といったジャンルが生まれるかもしれない」とまで言っている。

○県近代文学館で特別展「平成の青森文学」が開かれている。千空さんの展示もあるのでぜひ見ていただきたい。会期は9月24日（月曜・振替休日）まで。

2018年8月20日発行

会報『千空研究』第15号 非売品（会員配布）

発行 俳人 成田千空研究会

佐々木達司

〒037-0004

五所川原市唐笠柳藤巻467

青森文芸出版内

TEL 0173-3515323
FAX 0173-3518414